
Advent Children

蒼月 空華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Advent Children

【NZコード】

N6710A

【作者名】

蒼月 空華

【あらすじ】

戦いはすべて2年前に終わったと思っていた。しかし、星はまだそれを許していなかつた。クラウドは一度は心を開いていたはずだが、これから始まることによつて再び、固く心を閉ざしてしまつた。

(前書き)

FF7ACが始まる前までの話です。

FF7ACで100お題の1番目でもあるので、タイトルは同じですが、話の内容は異なります。また、少しFF7ACでのネタバレが含まれていますので、「注意ください。」

すべてが終わったと思った。

何もかも全部。

でも、星は許さなかつた。

たくさん、傷つけられてしまったから。

セフィロス。

アンタが残した傷はまだ癒えていない。

俺は一生、

許さない。

} Advent

Children }

【Cloud-side】

↖ PPPPPP · · · ↘

鳴り響く携帯。

しかし、持ち主は取るつもりしない。

『・・・現在電話に出ることができません。『用件のある方はペーパー』という発信音の後にお名前と『用件をお伝え下さい・・・』』

『もしもし?クラウド?相変わらず電話には出てくれないのね。仕事入っているからなるべく早く帰ってきて』
相手はティファからだ。

すべてが終わってからティファはセブンスヘブンを再開させ、その中で俺はデリバリーサービス始めた。

デリバリーサービスと言つても、バイクで行ける範囲まで。
いくらメテオがなくなつたからと言つても、モンスターは普通に生息している。

俺は別に苦ではないが、客に届ける品物を傷つけては困る。

「・・・戻るか」

ティファは仕事に関しては色々と煩かつたりするものだ。
俺は愛車・フェンリルにまたがり、ミッドガルへと向かった。

【Tiff a - Side】

「クラウドまた電話出ないの～？」

マリンがあきらめ声で尋ねる。

私は頷いた。

でも、分かつてゐる。

電話に出なくとも、クラウドは絶対聞いているつて事。

「仕方ないんだよ。クラウドはそういう人なんだよ」

私は肩をすくめながらマリンに言つた。

「ふう～ん・・・でもちゃんと戻つてくるもんね。クラウドは！」

「そうだね。クラウドも一人は嫌なんだらうし」

少し笑みを含めて言つ。

マリンはそれを聞いてクスクス笑つた。

「クラウドは淋しがり屋さん？」

「うん。 そうだよ」

私がだけが知つてゐる。

クラウドの事。

でも私だつてクラウドと同じ。

一人は嫌だから・・・。

「じゃあクラウドが帰つてくる前にお店の準備しようか」

「うん！」

マリンはよく店の手伝いをしてくれる。

店には沢山のお客さんが来るので一人じゃ大変だから、とても助かつてゐる。

＜ＰＰＰＰＰ・・・＞

店内の電話が鳴り響く。

私は仕方なく電話に出る。

「はい、ストライフ・デリバリー・サービスです」

『おお～本当にデリバリー・サービスやってるんだな～』

「バレット？ なんでこっちに電話するの？ 携帯があるじゃない」「いや、クラウドがデリバリーサービスを始めたっていうのを聞いてな。試しにさ』

「それだけなの？』

『それだけじゃないって。実はこっちの仕事がまだ終わらないからマリンに伝えておいてくれ』

「忙しいんだ』

『早く帰りたいんだけどな。悪いな』

「ううん。頑張つてね』

私はそう一言言つと、電話を切つた。

「マリン』

「な～に？』

「バレット、帰るの遅くなつちやうつって』

「そうなの？ 仕方ないよね』

マリンは肩をすくめた。

マリンはまだ六歳なのに少し大人びている。

店に来る人もよく褒めてくれる。

本当、しつかりした子だと思う。

〈カチヤツ〉

「あ、クラウド！』

クラウドが戻つてきた。

【Cloud - Side】

セブンスヘブンへと俺は向かつていた。
途中、エアリスがいた教会へ寄つた。

ここだけは何も変わつていない・・・。

「花・・・まだ咲いている」

エアリスは言つた。

『ここだけ花、咲くの』

「何も変わっていないんだな・・・エアリス」
俺はそつと彼女の名を呟いた。

『「」だけはね・・・』

「？」

エアリスの声が聞こえたような気がした。
微かに吹く風の音と流れるようにな。

花が凜と咲いているだけだ。

エアリスの姿はもうここには無い。

「・・・行くか」

俺は再び、フエンリルを走らせた。
セブンスヘブンへと向かう。

〈カチヤツ〉
ドアを開ける。

中には店の準備をしている一人の姿があった。

「あ、クラウド！」

マリンが呼んだ。

すると、ティファアが俺の方へと振り向いた。

「お帰り。仕事今日も来てるよ」

ティファアは笑顔で言った。

俺は「ああ」と一言言うと、伝票を見た。

【依頼者 エルミナ・ゲインズブル 荷物 花束 届け先 忘ら
るる都】

伝票を手に取り、それを握った。

そして、荷物を手に抱え、ドアノブへ手をかける。

「今から行くの？」

「ああ。花だからすぐに行かないと枯れるだろ？」

「そう・・・だよね。いってらっしゃい」

「ああ」

俺はそのまま外へと出た。

すると、店の中からマリンが出てきた。

「早く帰ってきてね～！！」

マリンが手を振って言った。

俺は軽く手を振ると、フンリルにまたがり、おひるの都へと向かつた。

エアリスが眠る場所へと。

【Tiff a - Sida】

「クラウド、また仕事行っちゃったね」
マリンが言った。

「そうだね。でも仕方ないよ」

私はそう言って、再び店の準備をし始めた。

〈力チャ〉

「？」

ドアが開いた。

誰だろうと思い、ドアの方へと目を向ける。

「あ、ユフィ！」

「やつほ～来ちゃった」

相変わらず陽気なユフィがそこにいた。

「どうしたの？急に」

「マテリア集めたからクラウドに預けようと思つて」

「どうしてクラウドに？」

「クラウドが一番物持つてなさそうだし、場所がありそりだから」
ユフィはいたずらっぽく言った。

思わず笑ってしまう。

確かにクラウドは物を持たない主義。

マテリアを置く場所なら沢山あるだろう。

「なんだ。でも今クラウド配達行つてるから」

「そつか。クラウドいくら電話しても出ないし、留守電入れても返

してくれないし」

「あはは（コフィイには返さないんだ……）」「ま、いいや。じゃあこれ渡しておこしてくれない？」

「うん。いいけど、もう帰るの？」

「マテリア集めするからさ また来るよ」

コフィイはそういうと、風のよに去つていった。

私はため息を一つ吐いた。

「ティファ～あっちの片付け終わったよ～？」

マリンがダイニングバーの方から言つ。

私はそこへ向かった。

【Cloud - Side】

忘らるる都へと着いた。

俺はフェンリルを止め、荷物を届け先へと送るため、歩む。ここはいつまでも恐ろしいくらい静寂だ。でも、その方がエアリスも眠れるだろう。

「届け物だ……」

俺はそつと、荷物を湖へと浮かべる。

静かにそれは沈んでいった。

ちゃんとエアリスの元へ届くのだろうか。しばらくの間見つめる。

すると、風が吹いた。

『ちゃんと受け取ったよ』

声が聞こえる。

エアリスの声が。

『お疲れ様……でもねクラウド……』

『え……』

エアリスの声はそこで途切れた。

何かに邪魔されるように途切れた。

「・・・なんなんだ・・・?」

首を傾げ、俺はセブンスヘブンへと戻ることにした。

途中、再び教会へと立ち寄った。
エアリスが何を言いたかったのか考えながら。

フェンリルを止め、中へと入る。
相変わらず花は凜と咲いている。

光に包まれながら。

「何か言いたかったのか?」

俺は花を見つめながら呟いた。

しばらく花を見つめていた。

すると、ドサツという物音がした。

後ろを振り向いた。

すると、外に一人の少年が倒れていた。

「・・・?」

俺は少年の所へと足を運ぶ。

少年は俺の携帯を握っていた。

「・・・」

額に黒い痕がある。

星痕症候群。

ライフルストームにより起きる伝染病だ。

発症者には黒い痕があり、時期に命を奪う。

それに触ると、感染する。

知識はあった。

だが、見捨てるなどできない。

きっと、エアリスが連れてきたんだ。

俺はそう思い、少年を抱え、そのままセブンスヘブンへと向かった。

〈力チャ〉

「お帰りなさい・・・どうしたのその子?」

「！」の子は俺のところへ来たんだ

【Tiffa - Side】

クラウドが一人の男の子を連れて帰ってきた。

男の子は星痕症候群に発症していた。

「とにかく、部屋に連れて行って上げて」

私はそのままクラウドに男の子を運ばせた。

クラウドはベッドに男の子を寝かせる。

すごく苦しんでいる。

「マリン、タオルを水で濡らして持ってきて」

「うん！」

マリンは急いで水道場へ向かった。

「どこでこの子を？」

「フエンリルの前で倒れていた」

「もしかして、携帯電話・・・」

「ああ。俺の携帯を握っていた」

「じゃあさっきのこの子だつたんだ・・・」

私はさつき電話がかかってきた男の子だと察した。

悲しそうな声、震えている声、ひしひしと伝わってきた。

「ティファの携帯に繋がったのか？」

「うん・・・『たすけてください』ってずっと言っていた。クラウドの携帯で良かつたね」

「ああ・・・」

「ティファ、持ってきたよ！」

マリンが濡れたタオルと、桶を持ってきた。

私はタオルを男の子の額へとのせ、黒い痕をふき取った。

「うつ・・・」

男の子は苦しそうな表情を見せた。

そして、ゆっくり口を開けた。

「気がついた……？」

「……ここは？」

男子が重たそうな口を開く。

「セブンスヘブンだよ」

マリンが身を乗り出して言ひ。

「セブンスヘブン？」

「あ、私たちの店の事。君、名前は？」

男子は俯きながら言つた。

「デンゼル……」

「デンゼル。君一人？」

「うん……」

悲しそうな瞳を見せる。

「そつか……そうだよね」

「……」

デンゼルは黙つたままこちらを見ていた。

「ここに居た方が良いわ」

私はそう言つた。

「え？」

「そんな身体じや何もできないでしょ？看病してあげるから、安心して」

私は笑顔で言つた。

「あ、名前言つてなかつたね。私はティファ」

「私はマリンだよ」

「あと……あれ？」

さつきまでいたはずのクラウドがいなかつた。

「どこ行つたんだろ？……」

私は呟いた。

「えつと、君を助けてくれたのはクラウドっていう人だから」

私はデンゼルに言つた。

「クラウド・・・？」

「うん。無愛想だけど、優しいよ
私がそう言ひと、ドアが開く音がした。

「クラウド」

「なんだ？」

「どこ行つてたの？」

クラウドが部屋へと入つてきた。

「薬取りにいつてた」

「あ、そうなんだ。ありがと」

クラウドは私に薬を手渡してくれた。

デンゼルは星痕症候群。

治す方法はない。

でもそれ以外にも、デンゼルは発熱、ケガなどが酷かつた。

「取り合えず、これ飲んで」

私は、デンゼルに薬と水を渡した。
デンゼルはゆつぐつと薬を飲んで、再び眠りへと着いた。

【Cloud-side】

「額見たか？」

「うん・・・」

「治療法はまだ見つかっていない」

「そうだね」

ティファは素氣なく返事をした。
きっとあの子はエアリスが連れてきたんだ。

俺はそう思つていた。

「これから、どうするの？」

ティファが尋ねた。

「あの子を引き取る」

「フフフ」

ティファは少し笑った。

「何だ？」

「やっぱクラウドは優しいなって」

「・・・・・」

ティファはそう言った。

俺が優しいって？

自分では分からぬ。

「一緒に、頑張ろうね」

ティファはそう言った。

しばらく毎日が流れた。

街中には星痕症候群で苦しむ子どもたちが増えていた。

俺たちはデンゼルと共にこの子どもたちの世話をすることになった。俺は少しながら自分の身体に異変を感じるようになつた。

左腕に重みを感じる。

す"ぐ痛む。

「・・・・・つ！」

激痛が走つた。

俺は左腕を抑えた。

「・・・・・」

抑えた手のひらには黒いドロッとした液が付着していた。

「感染つたか・・・」

取り合えずそちらにあつた包帯で左腕を巻く。

ティファたちに感染つたら困る。

俺は黙つて、セブンスヘブンを出た。

【T·i·f·a·-·S·i·d·e】

クラウドが店に来なくなつた。

仕事が入れば朝早くに来て、夜遅くに戻る姿はたまに見ていた。

でも、今まで自分の部屋にいる事があったのに、最近は部屋にすらいない。

何が起きたのか私には分からない。

エアリスだつたら分かるのかな・・・。

ねえ、エアリス・・・クラウドはどこにいるの？

「ティファ？」

マリンが心配そうな表情を私に見せる。

「あ、ごめん。デンゼルの様子は？」

「大分良くなつたみたいだよ。今度店の手伝いしたいって

「本当に？」

「うん！」

デンゼルの星痕は全く消えない。

でも、すごく強い男の子だつて事は十分に分かつた。

デンゼルを見ていると、昔のクラウドを思い出す。

「ティファ、クラウドまだ帰つてこないの？」

「うん・・・」

「どうしたんだろ？ね。何があつたのかなあ・・・」

こんな小さい女の子にまで心配させられるクラウド。全く仕様がないと思つ。

夜になつた。

店を閉めようとしたとき、バイクの音がした。

私は急いで、外に飛び出た。

「クラウド？！」

「・・・なんだ」

「どう行つてたの？...ずっと帰つてこないから心配したじゃない・・・」

思わず大きい声が出る。

「すまない」

「ねえ、また何か隠してるので？」

「・・・・・」
「黙つてちゃ分からぬよ・・・私たちじゃ力になれないの?仲間
でしょ?」

【Cloud-side】

俺はティファたちに迷惑をかけないためにも、教会へと住み着いた。
静かな場所だ。

でも、仕事をサボる訳にはいかず、仕事の電話が入ればセブンスへ
ブンヘと戻つていった。

しかし、極力ティファたちと距離をとつていた。

「クラウド?!

夜、セブンスヘブンへ伝票を置きにきたりティファが中から出てき
た。

「・・・なんだ」

「どう行つてたの? ! ずっと帰つてこないから心配したじゃない・
・

ティファに怒られた。

黙つていたからか。

相当、心配していたらしい。

「すまない」

「ねえ、また何か隠しているの?」

ティファに言われた。

隠すつもりはないが、隠さないといけない。

なぜかそう思った。

「・・・・・」

「黙つてちゃ分からぬよ・・・私たちじゃ力になれないの?仲間
でしょ?」

「ああ。仲間だ。」

でも、治療法はない。

むしろ、感染を広げてはいけない。

「今は・・・一人でいたいんだ。すまない」

俺はそう一言言つた。

「そう・・・」

ティファアはそのまま俯いてしまつた。

俺はティファアに伝票を渡した。

「仕事入つたら電話してくれ」

「・・・うん」

俺はそのままフェンリルにまたがり、今の自分の場所へと戻つていつた。

教会は夜になつても相変わらず花は咲いていた。

「・・・どうすれば良いんだ」

俺は頭を抱えた。

花の横隅にはユフィのマテリアが置いてある。一つ手に取り、マテリアの光を覗く。

淡い光が放つていた。

「・・・・・」

しばらくして、再び箱に戻す。

すると、また風の音が聞こえた。

『・・・無理してゐるね。ボロボロなのに』

「エアリス・・・?」

『クラウド、一人じゃないんだよ?無理しちゃダメ』

「でも・・・俺は・・・」

『みんなの助け借りないと、ダメになつちゃうよ』

「・・・・・」

「サラサラ」

花が風に揺れる音共に声はかき消された。

「・・・・・」

何か伝えたいことがあつたのだろうか。
俺はそう考えながら、眠りへとついていった。

そして、次の日仕事に行つたとき、奴らは現れた。
セフィロスコペー。

アンタ、いつまでこの星にいるんだよ・・・。
俺は、完全にアンタを消すまで生きてやる。
この星の傷が癒えるまで、アンタを許さない。

END

（後書き）

自サイトでチャレンジ中のFF7ACで100のお題の一一番最初の作品です。自分なりにFF7AC前の話を書きたかったので書いてしまいました。一部、参考としてFF7ACプロローグの話の場面があります。読んでいない方でも分かるようにしたつもりですが、若干分からぬ部分もあつたでしょう。是非、その部分はACプロローグを読んでみてください。また違ったAC世界を味わえますよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6710a/>

Advent Children

2010年10月10日17時12分発行